

『かかわりの表現』

—授業「リズム体操指導法研究」から見たもの—

田村 典子

はじめに

昨今の機械文明は、からだ（心身）を動かす機会を減少させ、人間が機械に操作される生活を強いている。医学や医療技術の発達は、傷病を負った体の部位を切り取ったり、他人や人工の臓器と取り替えたりすることも可能にしている。そしてこのような生活状況の普遍化が人間の生物学的なたとえば自然治癒力さえも低下させているようである。

一方で、昨今の子どもや若者は、自然や仲間とのコミュニケーションからも疎外され、感性や協調性などの基本的な資質をも希薄化させている。こうした一般的な生活状況が、他者（ひと・もの・こと）と「まるごとのからだ」で触れ合ったりする機会を奪い、結果として、他者の痛みや苦しみや悲しみや喜びを理解できない子どもや、キレる子や閉じ籠もりやニートという現代的問題の出現をもたらしているとも考えられる。

さらに高度情報機器やバーチャル文化の氾濫が、追い討ちをかけるかのように「モノ化する身体」状況を出現させて（高橋和子・2004）、人間性を埋没させようとしている。無表情。しぐさの不調和。暴力性の噴出。心身症。感動のない生活。21世紀の子どもたちは、いま、このようにさまざまな状況下で「生きる力」を衰弱させつつある。

このような生活状況を、佐藤学（2000）は、感受性とレスポンスを喪失した身体、硬い殻

に覆われ他者とコミュニケーションのとれない自閉的な身体、自虐的行為を繰り返す身体などを出現させる素地として捉える。この場合、佐藤の指摘する身体とは、本稿のいう「モノ化する身体」である。科学技術がどんなに飛躍的な進歩を遂げても、その結果として、本来もちあわせている自然な「からだ」のリズムや感性を失って、物象的な「身体」状況をもたらしたのでは、人間らしく生きていくことができない。

そうであるのならば、「文化」と「人間」との関係において派生するこうした身体の問題を取り上げるところに、「大学体育で何ができるのか」あるいは「体育の果たす役割は何なのか」という課題に応える展望があってもいいのではないか。本稿では、本学が長年にわたって課題としてきた付加価値追求型授業の一例として「リズム体操指導法研究」の授業に焦点をあてて、「学生」（主体者）と「他者」（ひと・もの・こと）との関係における「かかわりの表現」（コミュニケーションやホスピタリティ）の問題について、21世紀社会に求められる共生原理の構築のための要因という観点から考えてみたい。

I. 付加価値追求型授業

本学では、身体運動文化専修・体育学教室内に保健体育教育のあり方を不断に研究する任意機関として「授業開発研究委員会」を設

置し、付加価値追求型授業の開発を行ってきた。この「付加価値追求型授業」は1992年から推進している。本学の保健体育教育は「保健体育教育の総合化」「理論と実技の一体化」「生活科学化」という3つの基本理念のもとに展開されている。そしてこの理念をさらに深化させるために、年次ごとに新しいテーマのもとに授業開発を行ってきた。付加価値追求型授業を展開してきた。その一環として開発した「リズム体操指導法研究」の授業について検討してみたい。

1. 授業の概要

本学では、1994年に、軽快でリズムカルな、いつでも、どこでも、だれにでも気軽にできる「かんだい体操」を創作した。「リズム体操指導法研究」の授業では、この「かんだい体操」を題材にして、動きの習得をはじめとして、その指導法を学んでいく。

この授業では、授業の仕上げとして、本学の学生や教職員や地域住民の参加を呼びかけて、「公開授業」を開催する。受講生（以下、「学生」という）は公開授業でこれらの参加者を相手に「かんだい体操」を指導することになる。そのために、授業内容の一環として「公開授業の企画及び運営法」や「指導法の研究」なども組み込んでいて、その実践研究のもとに学生みずからが、課題探究と課題解決という側面において、付加価値的な学びを追求することを目的にしている。またこの付加価値追求型の学びは、本番の公開授業においても、地域住民などとの人間関係をとおして、一人ひとりの学生にとって斬新な経験をもたらすことになる。

2. 授業展開

リズム体操指導法研究の授業は、1期間（半年間）「15回」の授業を、下記の4段階に分けて展開している。1期間を通じての全体的な学習目標は「からだ（心身）」での「コ

ミュニケーション」である。

2-1 第1段階：からだの再確認に向けて

段階別の学習目標は「からだ（心身）のストレッチ」である。

第1回目の授業では、クラスが複数学部の学生（40名定員の男女）で構成されている関係で、「初対面の仲間づくり」を題材にして「かかわりの表現」を確認するために6人グループでの自己紹介から始まる。まず「からだ」と「からだ」のかかわりを感じ取る基本的なワークをみんなで行う。相手にからだを向けたり寄せ合ったりするだけで「かかわり方」が変わってくる。たとえば背中合わせで自己紹介すれば相手の話し声とともに背中に振動が伝わる。この振動は雄弁に語ってくれる。親しみがあったり。ぶっきらぼうであったり。からだの言葉と言い換えてもよい。からだの言葉は他者を身内と感じさせたり他者のままに閉じ込めたりすることにも正直である。話すときの手振りや身振りは、相手に伝えたい事柄と意味とを、膨張させてくれる。波動が伝わるのである。これも、からだの言葉といえる。こうして初対面の学生たちはまず「からだのストレッチ」を経験する。

次に2人か3人組でからだをほぐす。生身の自分のからだで、他者の「骨・筋肉・体温・息づかい」に触れてみて、「感じる・動く・ひらく・かかわる・表す」という他者との媒介要素としての「生きる力」のいかほどかを確認してもらうためである。相手と自分のからだに、「いま・ここ」で何が起こっているのか。気づきが起これば、次第に、心も身も、すなわち、からだがストレッチされて、仲間との「かかわり」の距離感が身近になってくる。人間が相手から受け取る情報は「ボディランゲージで55%、口調や音量などの話し方で37%、言語の意味から7%」という調査もある。

第1段階の授業構成では、こうした意味に

においても、全体の導入として「からだのストレッチ」問題を学生たちの「からだ」とおとして再考してもらうように計画している。

2-2 第2段階：指導法の習得に向けて

段階別の学習目標はグループワークとしての「かんだい体操の実践」である。

「かんだい体操」は12個の振り付け運動から構成されている。グループ別に「かんだい体操」を図解した動きの説明書を配付する。筆者（以下、「指導者」という）からは「体操」がどのような運動構成から成り立っているのかの説明にとどめる。実際の動きについては、6～8人のグループごとで、それぞれが実践研究する。説明書を片手にリーダーを立てて全員で動くグループもある。説明書にじっくり目をおしてから動きだすグループもある。12個の運動のなかから2個ずつを一人が責任をもって動きを理解し最後に全員でつながりあわせるグループもある。ワークの実践研究方法はさまざまである。

ワークが進につれて徐々に仲間同士の言葉かけが増えてくる。声も大きくなる。自然にでてくる声と笑いが、仲間との距離を、さらに近づけていく。「90分」の授業1回だけでは「通し」の完成に至らない。しかし2週目の授業ではほぼ「体操」の骨組みができあがる。指導者は、全体のグループの完成状況を見計らって、「かんだい体操」の正しい動きと、リズムのとりかたなどを助言する。「ウソ」「マジ」「ゼンゼンダメ」。上首尾のときは「ヤッタ」の声が飛び交う。まるでクイズを解くようにグループの声が波動する。この場合、声は、からだの言葉である。そうこうするうちに、「かんだい体操」の「オリジナル曲」を流す。音合わせである。

リズムに合わせて体操をするのはNHKのラジオ体操以来という学生もいる。特にリズム表現の経験の少ない男子学生には、苦手意識があるようだが、そのうち、「いま・ここ」

で起きていることに、からだは、自然と溶け込むようになる。リズムにのって動くことが楽しくなると、自分自身が「どんな動きをしているのだろうか」と鏡をのぞいてチェックするようになる。授業の回数が進むにつれて、みずからのからだは空間に開かれ、時間の流れとともに仲間同士のからだの広がりになれることになる。このころともなれば、「かかわりの表現」が個々の学生にそれぞれの意味をもたらしはじめる。

2-3 第3段階：公開授業に向けて

段階別の学習目標は「公開授業」の企画運営学習及び指導体験である。

指導者はまず公開授業に至るまでの大学内諸機関への手続きや吹田市教育委員会との対応について学生たちの理解を促す。この公開授業は吹田市教育委員会の後援で大学の地域貢献施策の一環としても開催されている。学生にはその仕組みについても学んでもらう。実践と理論の一体化というこの授業の教育理念を「からだ」で学んでもらうのである。

次いで学生は、公開授業に向けて、グループごとに一般学生や地域住民の参加を呼びかけるための「パンフレットづくり」を始める。同時に参加者の「受付係」や「案内係」や「指導担当係」などの役割分担を決めていく。そして、当日は学生みずからも授業の成果を発表することになる。

いよいよ本番である。最初に学生全員で「かんだい体操」の模範演技を披露する。拍手喝采のあと、参加者から、元気な声で「よろしくお願いします」の挨拶が一斉に起こる。学生は圧倒されながらも指導を始める。円形になって指導を始めるグループもある。2列横隊で鏡に向かって指導しているグループもある。参加者と向かい合って個別指導しているグループもある。指導の隊形はさまざまである。学生は、指導する立場と、指導される立場にとって、どのような位置取りがいの

かという指導法についても実践的に研究していく。もちろんあらかじめ骨子を計画(plan)してある。しかも本番ではぶっつけの体当たり指導(do)である。グループ指導であるので、参加者の反応や注文から、仲間同士の響き合う即興の反省(see)も起こる。公開授業では、このような「plan-do-see」の循環型学習が、ときにダイナミックに展開されるのである。

学生のリズム感と参加者のリズム感との相違。空間の移動。動きの大小。さまざまな予測していなかった事態が顕現する。突発的なさまざまな問題に直面しながら指導の終盤をむかえる。そのころともなれば、共有する時間の流れとともに、学生と参加者とが一体になって盛り上がる。歓声となったり。哄笑となったり。一瞬の静寂となったり。からだの言葉が躍りだす。いよいよ終わりである。参加者は「ありがとう」「楽しかった」とからだの言葉を誰彼なしにさわやかに残す。学生たちの顔は達成感と満足感のために紅潮している。「ああ、終わった」と安堵の声が一斉に起こる。ピーンとした緊張感が和らぎ、シャーンとした協同感が膨らむ。これが「かかわりの表現」なのである。



「公開授業」風景

2-4 第4段階：最終授業

段階別の学習目標は「振り返り」と「付加価値追求型学習の確認」である。

学生はこの最終授業での「振り返り」(reflection)においてここに至るまでの過程におけるみずからの「受講姿勢」や「学び」を自己点検して評価する。さらに公開授業における「成果」や「気づき学び」について反省してみる。ここにおいてこの授業の教育理念であるところの「保健体育教育の総合化」の問題についても学生みずからが考えてみることを促す。最終授業ではさらに学生みずからが学びとった付加価値の問題についても記述してもらう。大学であるからにはいかなる教科にあっても単なる「やりばなし」や「覚えるだけ」に終始するのであるならば授業としての価値を確保できるものでない。

この授業のもう一つの狙いは実践研究をとおして学生が身につけた学びを「生活科学」として実際の生活設計に役立てるところにある。本稿ではこの「役立てる」が個々の学生において膨らむとき「付加価値追求型授業」の究極的な目的が達成されると考えている。

II. 付加価値としての学びの諸相

本稿の研究対象のキーワード「付加価値」について、ここでは、「学生にとっての付加価値」と「参加者にとっての付加価値」という2側面から検討を試みておきたい。

1. 学生にとっての付加価値

学生の学びとる付加価値を整理しなおすと次のようになる。

1-1 企画運営の実践研究

学生は、公開授業の企画運営の実践研究をとおして、一般学生や地域住民の参加を呼びかけるためにたとえば「パンフレット」を共同作業で作るのだが、その間のチームワークには目を見張らせるものがある。この授業では、その成果を、「かかわりの表現」の変容の様式として捉えることにしている。この作

業において発揮される才能は専門職のコピライターの職能にも匹敵してまさにここに学びの総合化の課題があるように思える。

またこの授業では、公開授業に至るまでの、たとえば学内機関や吹田市教育委員会との打ち合わせの経緯に参画し、学生がその仕組みを理解することは、関西大学の根本理念であるところの「学の実化（じつげ）」の体得であると位置づけている。そして学生の振り返りを総括するならば、社会的仕組みへの参与のあり方についても、また、社会的視野のあるものの見方についても、学生は付加価値的に学びとっていることがわかる。

1-2 指導法の実践研究

学生は、指導法の実践研究面において、すなわちその過程と仕上げにおいて、特に公開授業をとおしての地域住民との触れ合いという機会において、その間に派生ある人間交流におけるさまざまな付加価値を学んでいる。異世代間交流。他者との人間関係。新たな自己発見。学生にとってはいずれもが新鮮な経験となっている。

この経緯は、逆説的にみれば、現在の大学生の年齢層がいかに希薄な人間関係上の経験しか持ち合わせていないという事実を実見させてくれることになる。授業開発研究委員会では、ここにこそ、「モノ化する身体」からの脱却のヒントがあると見定めている。

1-3 開かれた大学構想の実践研究

また昨今では、いずれの大学でも、「開かれた大学構想」のもとにさまざまな戦略が模索されている。しかしながら、学生が直接参加する学生ぐるみの「大学の地域貢献」という施策はいまだに希少である。こうした経緯において、関西大学におけるこの付加価値追求型の授業としての「公開授業」は独自性に富んでいるし、その実績からしても評価されるべきものであると考えている。また公開授

業を運営する学生もこの独自性については自覚しており、かつこの授業の狙いも、学生みずからが大学開放の意義を理解することにおいている。「ボクの大学」「ワタシのキャンパス」の自覚がそこから生まれる。この参画意識の高揚も学ぶべき付加価値の一つとして意義のあることではないのか。本稿ではここにも学生の「かかわりの表現」としての自己確認の発露があると考えている。

公開授業は教室における教師から学生に働きかけるという従来型の一方通行の場ではない。いわゆる「受け身」の授業ではないのである。さて学生は、こうした自覚を肌身で感じながら、主体的な課題解決の場として新鮮な実感を身につけるようである。学生は、このように他者（ひと・もの・こと）との「かかわり」という臨床の場において、みずから構築する「気づき学び」とおして、付加価値を膨らませるのである。次にその「膨らみ」のいくつかを学生の自己点検から拾っておきたい。

1-4 学生の自己点検から

学生は、最終授業の振り返りにおいて、学習成果や受講姿勢について、みずから自己点検して次のように評価している。

◆今まで経験したことのない形式の授業で戸惑いを感じた。リズム体操それ自体がはじめての経験であったが、グループワークをとおして、他学部の仲間とのところとからだでの触れ合いができ、友達がふえた。（女子）

◆公開授業の当日はとても緊張した。リズムにあわせて、からだを動かしながら、参加者に的確な言葉で指導するのは難しかった。それでも参加者の皆さんが一生懸命についてきてくれたことに感謝したい。（女子）

◆参加者の方は、中高年の方が多く、なかには80歳という高齢の方もおられ、一生

懸命に取り組まれる姿に胸を打たれた。
下手な指導も受け止めてくれて、地域住民の皆さんの元気のよいのには驚いた。
自分も見習いたい。(男子)

◆いつも授業の最初と最後にするストレッチ体操を見直した。今までは見くびっていたように思う。ゆっくりした動きに心が癒された。(女子)

◆公開授業の時どう説明すればいいのか指導に困っていたら毎週の授業に参加されている地域住民の方がそっと助け船をだしてくれた。とても嬉しかった。(男子)

◆公開授業を開催するまでに、大学のいろいろな機関や部署、吹田市の教育委員会などとの手続きが必要なことについて、先生から説明されて驚いた。「大変な授業を受講したのだなあ」と思った。運動嫌いの自分に活を入れて取り組んだ。(女子)

◆大学最後の体育実技で自分の希望した種目はテニスだったが外れてしまい予想もしなかったリズム体操にあたってしまった。最初はやる気がなかったが、グループの人とのコミュニケーションもスムーズになり、リズムにのって動けるようになってくると毎回の授業がすんだあとにからだが軽く気持ちよかった。この授業から貴重な体験をした。(男子)

◆この授業を履修したら男子学生は「5人」しかいなかったのも、恥ずかしかった。僕にとっては初めての経験だったが、音楽に合わせてからだを動かすことが、こんなに気持ちいいとは思ってもいなかったのもっと続けたいと思った。(男子)

このように授業をとおして学生は、人間関係と個々の責任問題を自覚しながら、参加者との「かかわり」をとおしてそれぞれの付加価値を見出す。こうしたみずからの「気づき学び」にこそ、本稿では「付加価値追求型授業」の目的が具現されていると考えている。

2. 参加者にとっての付加価値

公開授業に参加された地域住民の参加動機はおおよそ次の代表例に要約されている。

◆運動不足の解消。

◆健康づくり。

◆コミュニケーションの拡大。

◆生涯学習の場として参加。

しかし、参加者もまた、こうした所期の目的を超えてさまざまな学びを得ているようである。ここにこそ、本稿では、「開かれた大学」の意義があると考えている。さらに学生もまたこの参加者の「学び」にも気づいているようである。こうして学生と参加者とが、リズム体操指導法という授業をとおして、互いに双方向発信の「かかわりの表現」に気づいているのだが、ここにこそ、本稿の求める新しい学びの様式があるのである。

参加者は比較的に中高年の方が多い。参加者みずからの自己点検評価もみておきたい。

◆学生のエネルギーをもらって身も心も心地よい。よい気分転換でした。(50歳代)

◆学生に戻ったようで気分が若返りました。学生さんにとっても丁寧に指導していただき楽しく体操ができました。毎週参加させていただきたいです。(50歳代)

◆この授業に参加させていただき初対面の方と友達になれたことがよかった。この年齢では外に習いに行くのがはずかしいので、よい機会に巡り会えました。ぜひ他の公開授業にも参加したいです。(60歳代)

◆リズム体操のテンポが私には速すぎた。音楽に合わせてただ歩くだけでも汗が出てきた。久しぶりに思い切り身体を動かすことができました。(80歳代)

◆学生さんにとっても親切に指導していただきました。ありがとうございました。もっと時間があればしっかり覚えて帰れたのに。体操のあとのストレッチがとても気持ちよかった。からだ全体が癒されて気

分がスーッとしました。(40歳代)

- ◆大学を訪ねて若い学生さんと一緒にリズム体操を楽しむことができました。学生さんのエネルギーをたくさんいただき感謝しています。ところで、近頃の学生はと日頃は色眼鏡でみていましたが、関大の学生さんに接して見直しました。とても清々しい気分になりました。ありがとうございました。(60歳代)

多くは学生との対応問題について述べている。このような場における経験が参加者のみる学生像の変化をもたらすことは十分に予想されることである。昨今では異世代間交流が少ないことが問題視されている。そこで、こうした機会を大学が提供することは、大学の地域貢献施策として有効な課題となるのではないか。さらにこうしたプログラムにおける異世代間交流をとおして相互理解を高めることに貢献できるとしたら、参加者にとっても、参加動機を直接目的を凌駕するさまざまな付加価値が生じてくることになるだろう。

さて関西大学の体育では、付加価値追求型授業開発の視点から、これからますます進行することになる超高齢化少子化社会の出現に向けて次のように見積もっている。

- ①高齢化問題や余暇社会問題をテーマに、学生と地域住民同時参画型授業を展開して実践研究のステーション化を図る。
- ②少子化問題や学校5日制問題に関連して、近隣小学校の生徒の参加を得て、履修学生が指導し、「子どもの生活文化と体育の課題」を実践研究する。

本稿の期待は、こうしたプログラム展開において、学生と参加者の「かかわりの表現」がいかに体得されるのかにある。そのうえで、参加者の気づき学びという付加価値が生まれてくるのであれば、そこにこそ、学生が参画する臨床的教育現場において生成される新しい学びの様式が膨らむことになる。これが、「リズム体操指導法研究」の授業をとおして

見えてきたことの総括である。今後の課題としておきたい。

Ⅲ. おわりに

本授業から見えてきたことは、公開授業という場における人と人とのかかわりは、からだをとおしてまわりの空気やそこへ存在する人間の息づかいを感じることでできる臨床の場であるからこそ、またまるごとの自分を表現できる空間であると実感できる臨床の場であるからこそ、意味をもってくるということである。この意味が生成されるところ、身体運動を媒介とする表現にはからだの言葉が働くので、ときに発声言語は不要である。しかしこの場合、臨機応変に付随する「アッ」とか「オウ」などの感動の発声などは、本稿では、からだの言葉として、すなわち身体運動の「かかわりの表現」として捉えておく。

この意味の生成を表現する「からだの言葉」の働くとき、だからこそ、身体運動は、すなわちこの場合のリズム体操は、みずからの「からだ」を「他者」(ひと・もの・こと)と受動的に同調させる「かかわりの表現」を創造する媒体として働き、あるいは他者への「かかわり」を能動的に生成する媒体として働いていると考えられる(伴・2005)。換言すれば、この場合の主体は、身体運動を通路として、「感じる・動く・ひらく・かかわる・表す」という「かかわりの表現」体として他者と共感しあう「まるごとのからだ」なのである。

冒頭(「はじめに」)でも述べたように、現代社会の生活環境の激変によって、本来的に「まるごとのからだ」が持ち合わせている「かかわりの表現」体として働く通路を封じ込められて、「モノ化する身体」状況は出現している。この人間性の危機を打開するためには、他者とかかわりながら、からだの根源的な働きであるはずの「かかわりの表現」を

いかに導き出すのかというでだてが必要になる。そのでだてを構成するためには不可欠な要因がある。それこそは「感じる・動く・ひらく・かかわる・表す」という「からだ」の営みである。体育はこの「営み」を抜きにして成立するものでない。この問題こそとりわけ大学体育において何ができるのかという課題に向けての本質をとらえる鍵なのである。

関西大学の体育では、この本質をとらえる鍵を課題として、「かかわりの表現」体としての「まるごとのからだ」体験の場を学生にいかに提供するのかという授業開発の問題に苦心している。この苦心の結果が「付加価値追求型授業」の開発なのである。こうして、「公開授業」は、地域住民と大学との架け橋となって、10年の実績をあげてきた。この実績は、関西大学をステーションとして、世代を超えたコミュニティーとなっている。いま

関西大学では、この付加価値追求型授業開発の研究成果を踏まえ、2000年度から「生涯スポーツ研究ステーション計画」を推進しており、「0歳から100歳まで」の地域住民を対象とする学生との同時参画型の授業や研修会の開発研究を推進している。

【文 献】

- 1) 田村典子 2001 大学体育における新しい学びの様式の開発研究－関西大学における付加価値追求型授業の目指すもの－ 人体科学フォーラム2001
- 2) 高橋和子 2004 からだ－気づき学びの人間学－ 晃洋書房
- 3) 正高信男 2003 ケータイを持ったサル「人間らしさ」の崩壊 中央新書
- 4) 佐藤 学 2000 「学び」から逃走する子どもたち 岩波書店
- 5) 伴 義孝 2005 「気づき」の構造－実践と思想の対話 関西大学出版部